
輪廻と涅槃

皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻と涅槃

【Nコード】

N8522A

【作者名】

皐月

【あらすじ】

影千代と紅の出会い、任務前の昼休みまでのこと。出会いの時の続きです。

出会いの時 式幕

仮想期25年3の月10日AM10:00

「ふう、やっと着いた」

今、紅は自分の職場である、対モンスターのために10年前ほどに作られ今では世界中に支部を置いている、『聖導院』の南南西支部第5施設の正門前、紅はこの実戦部隊の一員で1〜20番隊のなかの6番隊隊長を務めている。

「よし、今日も一日気合入れてこう!」

そう言って自分に気合を入れて正門に入ろうとしたとき、

「ねえ、ちょっと」

と、いう声に反応して振り合えてみると、見覚えのない男が一人立っていた。

「え、私?」

正直自分でもおかしいと思ったであろうこの返答に男はうなずいてみせる。

「ここって、聖導院の南南西支部でいいんだよね?」

そうたずねたきた男の容姿は男にしては無駄に長く白い髪の毛に、だらしなく着こなしたくたびれた軍服、歳は紅より少し歳うえである。

「そうだけど、あなたは? 一般の依頼なら午後からなんだけど……」

「俺は影千代、今日からここに本部から転属になったんだけど、無事につけてよかった」

この言葉で、紅の周りの空気が固まった。

(え? 今この人難って言った? 本部……転属!?)

「じ、じゃあ本部から来るっていう幹部って……あなたが??」

「うん、そうだけど」

否定の返事を期待して問いかけてみたが、見事に期待を裏切った返

答。

それからしばらく紅はその場から動けなかった。

仮想期25年3月10日AM11:00

ここは会議室。

中心には支部長、それを囲むように1〜20番隊の隊長たち。

その中には紅と影千代の姿も見て取れる。

「・・・と、いう感じで今回の任務に当たってもらいたい」

支部長の説明の途中でも紅は上の空。

するとその紅の額に紙くずが当てられた。

「？」

上の空だった紅には何が起こったのか理解できずに、あたり一面を見回している。

そして紅の足もとに額に当たった物を発見し、紙くずの中身を開いてみる。

そこには、
へ紅どうしたの？さっきから元気ないよ？
と、書かれていた。

それを書いたのは5番隊の隊長で同じ年の氷見という紅と昔からの親友だ。

紅は、すぐにペンを取り出し理由を書いて氷見までまわしてもらう。氷見は届いた紙を開いてびっくりした目でこちらを見てくる。

「本当なの？」

口パクでたずねてくる氷見に対して紅はうなずきで返す。

それに追い討ちをかけるように支部長のせりふが続く。

「それと、昨日話したと思うが、今日からの任務で新しい戦力として戦ってもらおう影千代殿だ」

それを聞いた氷見は信じられないといった表情で影千代の方を見ていた。

仮想期25年3月10日PM12…30

「あんなボケラーっとした人なんかで大丈夫なのかな今回の任務」

「私もそれは心配で、なんかすごい不安だよね」

紅たちは出発までにまだ時間があるため食堂で昼ごはんを食べていた。

「ていうか、あの人本当に本部から来た人なのかな」

氷見が唐突に言った。

「どういうこと？」

「だから、あの人は本当は本部の日とじゃなくてほかの支部の雑用とかしてたひ・・・と」

突然氷見の語尾が薄れていったので何かと思い氷見の目線をたどってみると、真後ろにはモクモクと昼ごはんを食べている影千代が居た。

すると、紅たちの視線に気がついたのか影千代が振り返る。

「ああ、隊長さんたちも居たんだね、きずかなかった」

この言葉に二人は安堵のため息を漏らす。

「そうだ、俺この任務で二人さんと一緒に動くことになったから、よろしく」

二人の間に衝撃が走った。

（チャンス）

二人は同時に同じことを思った。

（（この任務でコイツの力を見定めてやる））

出会いの時 参幕

仮想期25年3の月10日PM1…30

紅・氷見隊と影千代たちは砂漠にいた。

「まったく、暑いわねえ」

つぶやく氷見に紅が続く。

「どうして私達が砂漠なのよ、それに」

と紅は影千代の方にちらりと視線を向けて。

「どうしてあんたは一粒も汗を流さないで涼しい顔していられるわけ？」

そうたずねる紅は汗びっしょりで目の下には黒いあざのようなものも見て取れる。

「そうだな、何でって聞かれると返答に困るけど、しいて言えば慣れてるからかな」

さらっと笑顔で答える。

「信じらんない」

とからからの声で氷見がつぶやく。

それから、ずっと歩いていくうちにいつの間にか先頭で歩いていた影千代の足が止まる、そしてその後ろを歩いていた紅は鼻っ面から影千代の背中に激突する。

「つたゝ…何とまってんの…」

と野次を飛ばそうとした紅だがこの光景に生つばを飲む。

「これは…いったい」

後に続いていた氷見をはじめとする隊員達もこの光景に絶句していた。

肉、砂漠の中にあるにもかかわらず、みずみずしいといった感じであたりには肉が散乱していた。

「これってまさか、9番隊と12番隊じゃ…ないよね」

氷見が恐る恐るといった感じで一人ゆぶやく。

「間違いない、9番隊と12番隊だ」

影千代はこの光景を目の当たりにしても冷静で、冷や汗すらも出ていない。まるでこの光景を当たり前のように見てきたかのように。

「うそ、9番隊と12番隊は1〜20番隊の中で1位2位を争うほどの実力派部隊だよ・・・」

紅の声は震えていた。

「まだこの近くに居るかもしれない、探してみよう」

影千代は冷静に自分の意見を出す。

「そんな、無理だよ・・・私達じゃ敵いつこないよ」

「そうだよ、それにそれでほかのみんなが・・・被害が増えたらどうするのよ、今は応援を待ってるべきよ」

と氷見と紅は説得するが。

「じゃあ俺一人で行く」

そう言って歩き出す。

「ちょっと待ちなさいよ」

紅は先に行く影千代の腕を取ろうとしたときだった。

「みんな逃げろ！」

影千代の叫びと同時に影千代の前方10m付近で砂がいきなり盛り上がる。

そして、その数瞬後には紅隊と氷見隊の約半分が唯の肉片と化したのだ。

「え？」

硬直する紅たちの眼前には、口からは人間の肉を銜えた黒龍の姿。

「早く逃げろ！」

紅たちの硬直は影千代の激昂によってとかれる。

「みんな逃げて！早くここは私達が何とかするから、早く！」

紅が隊員に指示を出すと隊員たちは我先にと駆け出す。

だが黒龍は逃がさないとばかりに、隊員達の後を追おうとするが紅と氷見がその前に立ちはだかる。

「影千代、あんたも逃げなさいここは私達がなんとか・・・」

バシーン！

その氷見の台詞は最後までは言えなかった。

黒龍は氷見を弾き飛ばすと追い討ちをかけるべくその氷見との距離を縮めに掛かる。

「余所見してんじゃないわよ！」

ガキン！

紅は氷見を助けるべく渾身の力で黒龍に切りかかるが、黒龍には傷一つつけられずに真っ二つに折れる。

「そんな・・・」

そして紅は折れた剣を握り締めたままその場にひざまずく。

聖導院の実戦部隊の隊長2人だが黒龍には遠く及ばず、2人とももう戦える状態ではなくなっている。

そんな2人にとどめをさすべく、その太く巨大な腕を振り上げたとき、黒龍の頭に少し大きめの石ころが投げつけられる。

「残念だけど戦える人間はまだここに一人居るんだけどな」

その声に我に帰った紅は信じられないといった表情で影千代を見る。

「バカ！どうして・・・」

「くくく」

紅の言葉は黒龍の野太い声でさえぎられる。

「笑わせてくれる、そんなひよろひよるな体で我に勝てると思うてか！」

黒龍の問いに影千代は笑って返す。

「ははは、あんまり外見で人間を見てると大恥かくよ？黒龍さん」

その影千代の言葉は黒龍の逆鱗に触れてしまい、黒龍は影千代に向かってものすごい勢いで突進していく。

それを見た紅は影千代を助けようと力を振り絞るが力がでずにその場に倒れてしまう。

「だめ、影千代・・・逃げて！」

時すでに遅し。

影千代はもうよけられるほどの時間がないほど距離を詰められてお

り紅は無意識に目を閉じる。

「まったく、バカだね何の考えもなく突進してくるなんて」
目を閉じた闇の中、紅は目の前にあるであろう恐怖で一気に意識が薄れていき、そのまま途絶えてしまった。

出会いの時 巻幕（前書き）

修正版です。

壹幕

仮定期 28年12の月5日 AM 2..30。

(今日は寒いな)

密林。

その中には二つの大小異なる影。

(紅、今何してるかな、寝てるかな)

小さい影は重症を負った為仰向けになっている。

大きい影はその5メートル付近で息絶えている。

仰向けに倒れているのは、人間の『影千代』。

息絶えているのは、まるでおとぎ話にでてきそうなドラゴンの容姿をしている。

（まいったな、応急薬もないし、俺このまま死ぬのかな）

影千代はもうほとんど光のない目で、夜空を見上げている。

（だめだ、もう何も見えないや・・・）

「最後に・・・、紅に・・・会いたかったな」

【好きだから、大好きだから・・・あなたを愛しているから、ずっと・・・ずっとあなたの隣にいたいと思っちゃだめですか？】

「俺も……一緒に……居たかった」

そして、彼は静かに息をひきとった。

約4年前

仮想期 25年3の月10日 AM 7:30。

とある小さな村の、小さな家の中のベッドの中。

外見は、15、6歳くらいの年代に見える少女の姿。

《じりりりりりりりりりりつ》

そして、この小さな家に鳴り響く目覚ましの音。

「んん、もう朝ですか・・・」

そういつて、少女はムクリと起き上がったが、目覚ましを止めるとすぐにまた布団にもぐる。

「あと、もう少しだけ・・・」

そういつて、二度寝を始める少女だが、

「ご主人、起きて朝ですよーごしゅじゅん」

と、少女の耳元で何か奇妙な、羽の生えた天使のような生き物がささやいている。

だが、ここは少女のほう一枚上手のようだ。

「・・・・・・・・ZZZ」

少女はすでに寢息を立てており、起きるところか目も開けようともしない。

そこで、天使のような生き物はどこから取り出したのか大きなフライパンとオタマを掲げてなにやら意味ありげな微笑を浮かべている。

「おーきーろー！」

ガンガンガン！

そして、天使は自分が出せる精一杯の声＋フライパンの音で少女を起こしに掛かる。

これで少女も観念したかのように一気に飛び起きた。

「おーきーろー！」

それでもなを叫び続ける天使。

あまりの音の大きさに、少女も耳を塞ぎながら叫ぶ。

「起きてる、起きてるよだから落ち着いて、おーちーっ！いてー！」

・・・・・・・・なんとも間拔けな光景である。

「あ、やっとなってきたかー。まったくどうしてこう、ご主人は朝に弱いからねー」

と、あきれ返った様子で天使が言う。

「しょうがないよ、今の時期は暖かいんですから」

と、言い訳する少女。

「朝起きれないことを季節のせいにしなさい！じゃあ私は朝ご飯作ってきますからね、寝ちゃだめよ！」

「はいはい、っとね」

「返事はいいかい！」

「はい」

といった感じで少女の朝は始まる。

仮想期25年3月10日AM8:00

「ごちそうさまでした」

朝食を食べ終え食器を片すと、少女は一度伸びをして玄関の方に向かう。

「じゃあ、ティリエル行ってくるね」

「うん、気をつけてね、今日は難しい任務なんですよ？」

ティリエルと呼ばれた天使は少女を心配した感じで聞くと。

「大丈夫、それに今日は本部から幹部の人が来るって聞いてるから巧くいくよ、きつとね」

心配するティリエルをよそに、おどけた感じで言ってみせる少女。

「その自信過剰は紅の悪い癖だよ」

凶星を突かれ「えへへ」とふやけた感じに微笑する紅。

「ま、私なりに気をつけますよ、じゃ行ってくるね」

「いってらっしゃい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8522a/>

輪廻と涅槃

2010年11月2日02時25分発行